

〈はじめに〉

私たちは、日々無意識に、何の苦労もなく、母語である日本語を話しています。話す、という活動は、当然のことながら、日本語を聞き、理解し、そして発音する、という行為によって成り立っているのですが、私たちは、余程、聞き慣れぬ単語や、使い慣れぬ単語でないかぎり、ことばの聴取や発音に躊躇することはありません。◆しかし、たとえば、韓国語を母語とする人にとって、日本語のツとチュの音を区別して聞くことは、非常に難しいと言われています。また同様に、中国語話者にとって、タとダのような、清音と濁音は、どちらも同じような音として意識されるようです。それらの音は、韓国語や中国語の会話においては、区別する必要のないものであり、日本人が英語の〈R〉と〈L〉を聞き分けられないのも、同様な理由によるものです。私たちは、それぞれの母語の理解に、最低限必要な音だけを、特化して聞くことができるように仕組まれている生き物です。◆音韻認識(もしくは知覚)に未熟さを持つ子どもは、他の国の言語音を聞きとれず首をかしげている、これら外国人の状況と、多くの点で類似していると思われます。発達過程における何らかの問題により、日本語における音のカテゴリー化(耳に入って来る様々な言語音を、日本語の音韻体系の中に、仕分けすること)が進んでいない子どもたちは、その結果として、構音の誤りや不明瞭を抱えることが多く、また文字表記の習得や習熟にも困難を来しています。しかし、音の受容過程の精密な分析は難しく、原因と結果の関係が、不分明なまま、学習を進めざるを得ない、というのが、療育の現状ではないかと思います。◆それでも、一定程度、有効と考えられる事柄はあります。そのひとつは、理解(認識)と産生(表出)の相補性に関する点です。音韻弁別が不完全であっても、練習によりその構音が習得されるにつれ、弁別能力が高まり、またその聞き分けの精緻化により、構音もより正確化する、というプロセスはよく経験するものです。また、瞬間性の音に対して、持続性のある標識を与えることも有効です。かな文字の学習は、捉えにくい音表象にヴイを与える働きがあります。また、やはり相補的に、音韻認識や構音能力の向上が、文字の誤表記軽減につながって行きます。◆今後、より効果的な評価と学習方法が、昨今のIT化とともに、生み出されて来るような気がしています。自分自身にその力はありませんが、それまでのあいだ、とりあえず、できる工夫を考えて行きたいと思っています。